

北大大学院文学研究科准教授

樽本 英樹さん



たるもと・ひでき 名古屋出身。東大大学院博士課程修了。専門は国際社会学。06年から本紙夕刊文化面コラム「魚眼図」筆者。48歳。

新大学生に贈る「教養論」

北大大学院経済学研究科教授

橋本 努さん



はしもと・つとむ 東京都出身。東大大学院博士課程修了。経済思想、政治哲学が専門。著書に「学問の技法」「帝国の条件」など。46歳。

1990年代半ばの北大には、バンカラな学生もいて、羽織はかま、げた履きでキャンパスを歩いていた。ほとんど授業にも出てこなかったが、自分が気に入ったゼミにはやって来て、教官に議論を挑み、そのまま酒宴になり、研究室に泊まっていた。そういう学生はいなくなつた。

教養とは何だろう。就活成功を目的とする現在の大学教育では、実学的な専門性が志向され、教養は敬遠されがち。しかし、教養は手段として、目的として、機能するはずだ。学生のみならず、ともに考えよう。
(編集委員 高島伸一)

現代の教養は、逆境・試練に立ち向かう手段、ツールとして定義されるのではないか。学生にとって最大の試練は就活だ。愛情たっぷりと言われてきた若者が味わう、初めての挫折かもしれない。面接でひどいことを言われるなどして、打ちのめされ、落ち込む。そこを

月曜討論

内面を磨く「役立たず」

学生の実学志向は明らか。大学の教養課程も期間が短くなるばかりだ。世の中は、教養を求めていないようにみえる。

しかし、目的として出発する教養があってもいい。何のプランも見いだせないとき、どうしていくかを考える力になる。自分が面白いと思つて追求していかないと、教養は身につかない。「マルクスを読み、議論すると楽しい」と思えないと始まらない。役に立つか、立たないかといったら、たぶん役に立たないか。コミュニケーション能力が必要なのもわかる。しかし、下手したら、お調子者だけが得をする。大切なのは伝える内容だ。その内容とその人の内面を磨くものが教養なのだ。現代はかつてのようなライフプランがあてはまらない。「大を出て、就職して、結婚して、子供を持つて」というプランが

いだろう。だからその教養だ。企業は学生に「グローバル人材」であることを求める。英語ができて、欧米人とやり合える人材だ。大学は社会的役割を担わなければならないから、そのような人材を育成する必要は認める。しかし、それだけでいいのか。大学が単位取得と卒業認定だけの権威になっていないか。コミュニケーション能力が

留学などの実践によつても身につく。「一種の「コツ」ともいえる。いろんなコツがあり、それらがベースになっていく。「本の飛ばし読み方」「書店での本の探し方」もベーシックな教養だ。就職の際にはコミュニケーション能力が求められる。異なる世代間の会話を成り立たせるのは、それぞれの時代の書物である。その投資をどこに持つて

試練乗り越えるツール

あり、映画、音楽だ。それらを世代横断的に読み、見て、聞けば教養と能力は高められる。かつては、大学に期待する学生は少なかった。大学は就職までの一時期を過ごす空間として認識されていた。就職すれば、会社が現場主義で徹底して教えてくれるシステムがあった。このシステムは激変したが、

いくか。そこにツールとしての教養が現れる。アメリカの知識人たちは80年代のジャパンバッシングのころ、徹底して日本を研究した。現在の対中・対韓関係を見ると、日本人はいまこそ中国・韓国の文化や歴史を学ぶべきだと思う。学生のみならず、社会人にも求められる教養ではないか。